

論文の内容の要旨

論文題目 近世期オランダの流通構造
1580 - 1750 年のアムステルダムにおける商品別専門商の展開を中心に

氏名 杉浦 未樹

近世期にオランダが急成長を遂げヨーロッパ商業の頂点に上り詰め、「中心ステープル（世界市場）」としてヨーロッパの商品分配を担った点に異論はないが、その流通・商業については仲継貿易による交易圏の拡大とそれを担う貿易商の成長から評価され、それ以外の商業部門は貿易に偏重する経済体制の下に発展をゆがめられるか極めて緩慢に成長したと両部門が乖離するなかで、位置づけられてきた。

しかしながら、中世 近世期の商業・流通拡大を市場圏の拡大・深化として捉えていく上で、流通上のリスクがいかに克服されて新たな商業専門職種が機能分化し、商品の価値付けが変化し商品化し、商品を交換する場所の中心性が機能するのかという点が問題となる。中心地理論やそれを批判的に摂取した我が国のこれまでの研究が示すように、在地流通と遠隔地貿易を峻別せずに地域的な商品流通のメカニズムを見出していく必要がある。）

研究史上、近世期のオランダでは、後背地/国内流通を統合していく中間商人理論が欠落してきた。中心ステープル機能の見直しが図られ、アムステルダムを商品がいったん集積・貯蔵されて供給調整しながらリスクを減らして再分配される「ステープル」としてよりも、後背地に商品流通網を広げ情報の供給・伝達・蓄積を促すことによってリスクを減じる「ゲートウェー」としてみるのが提言されるなかで、後背地への流通を担った商業専門職種

の展開が問題となる。オランダにおいて近年さかんになってきた小売業史研究はイギリス消費革命論に強く刺激され、18世紀後半の一部の嗜好品の専門店舗の展開に注目する。しかしその様な限定したアプローチでは近世期のオランダの流通構造を捉えることはできない。本論文ではそこで、流通拡大期の1580-1750年のアムステルダムの商業職種全体の構成変化を捉えることを通じて、とりわけ商品別に専門化した商人の展開に注目して、その扱った商品を総体的に検証しながら、オランダの流通構造を考察する。

流通構造を位置づける前提として、オランダの近世期成長の内部構造を、第1章では中産層と労働者層の成長を中心に社会構成と所得分配の観点から、第2章では移民労働力が包摂し在住層が形成される過程から、論じた。

近世期のオランダは市民社会の開花と位置づけられる一方で、中産層成長の限界、労働者層の窮乏化から国内消費が成長しなかったと指摘されてきたが、この2章で、オランダの産業発展を概観した後に、複合的な中産層・職人・労働者層の職種の成長とその所得分配と、労働のあらゆる側面での移民の定期・継続的な流入があり労働市場が分断していたという観点から、検討を行った。

第3章 - 第5章までは、商品別専門商から商業専門職種の機能分化を検討した。貿易商コープマンの貿易総合商人としての専門化が強まるとともに商品別専門商が成長した。商品別専門商は貿易商コープマンの成長とともに16世紀から増大し始め、1580-1750年には商業専門職種の過半数を占めるまでに躍進し、商品種数は16世紀の市民権登録簿全体で40種であったのに対し、1742年定年では、都市の平均以上の収入層だけで120種に広がっていた。このように商品別専門商の成長は、細分化された商品種名と、一部の商品の商人数の多さ、そして所得の平均的な高さが特徴的であった。

この商人は複数の貿易商から商品を一手に集中させて独占を目指すのではなく、一人の貿易商の供給する商品を競りや商品取引所を通じて複数の商人間で振り分けながら成長していた。

これらの商人が商品別に専門化した理由も、第1に貿易商から振り分けられたとしてもなお大口量で供給される商品を複数種類は引き受けられなかったからであり、第2に貿易商コープマン、定期市、製造業者・生産小売などの他商業業態と分担するなかで、商品を限定されて成立していたからである。すなわち分配するリスクが十分に低く、マージンが見込めれば、商品別専門商に託すことなくコープマンや生産者は自ら流通を担った。商品別専門商が成長した商品は、他商業業態が流通を担うのに適さない性質を持つものに限定され、それゆえ商品別化していたのであり、従来想定されている大量生産の後に専門化が起こるという「専門化」とは異なっている。

商品別化しながらも、多数の商人が比較的高収入を確保できた最大の要因は、内陸河川網とその商品運送システムが発達し、拡大する後背地に向けて、海上貿易の大口量よりは少ないが小口量や陸上輸送の扱う量よりもはるかに多い「中口」の量で効率よく販売できたことである。定期便運行システムによるこの商品運送網は、頻繁に運行されたばかりで

はなく定時・定額制によって商品の運送リスクを著しく減少させ、個人が少量で商品注文も可能にしていた。

商品別専門商は、分配局面の仲買として、後背地・都市内と多方面の卸売・小売を同時に担うことが可能になった。いったん安定した収益を確保できれば、地域間流通にも他商品別専門商や貿易商人と共同しながら参画し取引を広げることができた。商品別専門商は商品取引所の商品別に分かれたブローカーを通して分配のため商品を受け取る側であると同時に、手持ちの商品を貿易商へと渡すことも珍しくなかった。その意味では商品別専門商は貿易に関わり、問屋機能も一部担っていたのである。

また特筆すべきことは、この商品運送網が利用できたことで、商品別専門商は定住の商人層として各都市に分散して成長したことである。このため巡歴卸売商が発達した場合に比べて国内全体の人数の総数が増加したと考えられる。各都市の商品別専門商同士の横断的な商品交換がさかんととなり、それによって商品供給が安定した同一商品の中でも各商人が多品種、多銘柄を取り揃えることを可能とした。

図 6- はこの商品別専門商のありかたを図式化したものである。商品別専門商の特徴はここに示されるような多層性・多方向性・多機能性にあったといえる。海上貿易を通じて他の品物とともにもたらされた商品は、それを専門とするブローカーを通して商品別専門商にもたらされ、商品別専門商は都市内外の商品別専門商同士・小口売り・消費者と多方向に販売を行った。またブローカーを通して商品取引所へ商品を再び海上貿易にのせる方向性もありえた。これは、イギリスの中間商人論において想定されている卸売 - 小売による正統的配給組織とは異なる。また商品別専門商は、多方向に商品を供給しているが、それは独占を目指して商品を貯蔵して供給調整したというよりも、多人数でリスク分散をして、供給の安定を図っていたといえる。

このような特質をもつ商品別専門商の発展から、アムステルダムを中心性や、そのヨーロッパの商業・流通構造上のありかたも、商品を集結させて貯蔵する面よりも、周辺への流通を促進していく面をより重視して考察される必要があるだろう。